巻頭言

文化・芸能によるまちづくり

ーその本質的な役割と協同ー

池上　惇（京都大学名誉教授）

ウイリアム・モリスの有名な言葉に「生活の芸術化による社会進化」がある。生活の芸術化には、二つの意味がある。

ひとつは、「人間自体の芸術化」である。これは、人間自体が、厳しい人生の中で、それに耐えること。そのなかで、自分や自分たち自身の内面にある、他人を思いやる心や、清らかな魂、深い思考力や、社会や環境を変えようとする構想力などを高めることだ。

そうすることによって、自分の人生を「芸術作品であるかのように」かけがえのないものに変えていく。これによって、生きる意欲を高め、創意と工夫を生み出し、仕事を起こし、地域を創り、人を育て、文化を高める。これがなくては、新たな雇用や仕事の発展はない。

人間は、自分を高めるときに、自分のおかれた地域や、都市、“まち”を積極的に変革し、それによって、更に自分を高めようとする。

ここに、もう一つの「生活の芸術化」がある。それは、人間が、自分の身のまわりにある生活そのものを「芸術化」するよう努力し、それによって自分自身をさらに「芸術化」しようとするのである。

このような“営み”は、現代の協同労働の中に、非常に多くの実例を見ることができる。

破産に瀕した夕張の町で、人間の尊厳を守りつつ、崩壊する財政の下で、毅然と芸術文化活動や社会活動に取り組む人々の姿は美しい。感動的だ。

それは、自分の人生をかけがえのない、「文化的な価値を持つもの」として、人々と共に学び、人々に奉仕し、協働し、高まりあいながら、「文化による“まちづくり”」を実行されている。賃金が日本最低の夕張で、公務を担い、医師や教師や学術人、協同人とともに、人びとの「命と暮らし」を支えながら、市民やNPOと連帯して、芸術活動の火を絶やさず、芸能を振興して、あらたな事業を起こす。これらの事業は、福祉・医療から公共事業にまで及ぶが、一貫しているのは、創造的な労働を伴い、その多くが協同労働によって支えられていることである。創造的要素は、文化的な価値

を持ち、文化的要素こそが新たな仕事を起こす。これが、現代の雇用や産業の発展には欠かせない。

現代産業振興の鍵は、多様な文化産業の発展にある。その理由は、人びとの暮らしが限界状況になればなるほど、自由への欲求が高まり、生きるための知識を求め、生命力を取り戻す感動的体験を必要とするからである。ブレヒトの言うように、「死に直面するからこそ芸術が必要」なのだ。そこで、自由に語られる協同の場を創り出して、ともに、自由を享受し、生命や生活に必要な芸術や学術を媒介としつつ、学習によって高まりあう。

このような動きは、いま、全国に広がっている。

この大不況の中で、仕事を起こし、雇用を増やすには、「文化による“まちづくり”」が欠かせない。

それは、いかに経済状況が厳しくても、絶対に解雇や派遣切りに走らない。先駆的な経営は、労働者の参加を得て協同労働を組織の内外に展開し、高いモラルをもって、人びとの生と暮らしを守るとともに、市民や消費者のニーズを正確に掴み、生活の質を高める欲求を発見し、それに応える財やサービスを創意工夫によって、仕事が起こされる。ここでは、生産者と享受者（クライアント）との対話によって、仕事が起こされる。

この「仕事おこし」の雰囲気や社会的環境は、「文化による“まちづくり”」によって創り出される。そこには、一方では、「生活に芸術化を進める個人や協同人」という「高い志」を持つ人びとが生まれる。これは多くの教育投資を生み出す。他方では、その地に根ざした芸術・芸能の創造的発展によって、人びとの身の回りの調度品、建築物、まちなみを「芸術化」する営みが推進される。これは、情報産業、福祉産業、建築産業はじめ、多くの文化を取り込んだ産業を生み出す。

このまちでは、人びとが自由に集い、感動し、交流し、アイディアを出し合う空間が創り出される。芸術作品や音楽や演劇は、そのものとしても価値があるが、それらが人びとの人生を輝かせるならば、さらに素晴らしい。

大不況に生きる私たちは、この輝きをあらゆる地域や都市に創り出そう。それは、産業振興、雇用拡大の鍵なのだ。